

ISMCS2017参加印象記

国立循環器病研究センター研究所人工臓器部

築谷 朋典

Tomonori TSUKIYA

International Society for Rotary Blood Pumps (ISRBP) が、発展めざましい機械的補助循環法全体を対象として、その名称を International Society for Mechanical Circulatory Support (ISMCS) と変更してから、最初の大会が2017年10月16日～18日の3日間にわたり開催された。会場は、アメリカ合衆国アリゾナ州ツーソン市郊外に位置する Loews Ventana Canyon Resort Hotel である (図1)。西部劇の舞台にもなる荒野とサボテンが有名なツーソン市は、大会長である Prof. Marvin Slepian の所属するアリゾナ大学があり、学研都市としても有名である (図2)。

大会には世界各国から約270名の参加者が集い、補助人工心臓をはじめとして、全人工心臓、人工肺、低侵襲型デバイスなどの機械的補助循環法全体にわたる研究発表がなされ、様々な分野の参加者により活発な議論がなされていた。発表件数も多く、会議は3日間とも午前7時から午後7時ごろまで連続して行われた。米国での開催とあって、豊富な症例数に基づく優れた演題が数多く発表されていたことに加え、会場まで来ることができない一部の講演者は、Web 経由での発表を行っていたことが印象深かった。Web での発表はライブ映像なので質疑応答も含め順調に行われており、今後の国際会議における一つのあり方になるのでは、との印象を持った。

一方で、研究者同士が直接会場にて、交流することの大切さを口にする参加者が多かったことも印象的であった。また、ポスターセッションの討論時間は十分とは言えなかったにもかかわらず、研究者同士の熱心な意見交換が行われていたことは印象的であった。

■ 著者連絡先

国立循環器病研究センター研究所人工臓器部

(〒565-8565 大阪府吹田市藤白台5-7-1)

E-mail. tsukiya@nvcv.go.jp



図1 アリゾナ大学チアリーダーによるダンス (Gala Dinner にて)

研究内容では、補助人工心臓については、米国で HeartMate II を装着した患者の最長補助期間が10年を超えたことが報告され、今後日本でも始まると予想される destination therapy (DT) の重要性がますます高まるものと感じられた。また、磁気浮上型ポンプを用いた HeartMate III システムに関する報告もあった。ポンプ内血栓の少なさが強調された一方で、脳梗塞に関するリスク自体は HeartMate II とほぼ同等であり、ポンプのみが問題ではないということが再確認されていたようである。他にも、拍動流のもつ意義に関する基礎研究が増えており、連続流ポンプの回転数変動により作成した拍動流の影響や、拍動流を発生させるタイプの補助人工心臓の開発事例なども報告されていた。さらに、全人工心臓のセッションでは複数のグループから開発報告がなされ、連続流ポンプを結合させたものや往復動アクチュエータを用いた拍動流タイプなど様々な形式のシステムが開発されていた。

本学会は、分野を超えた議論が活発になるように、伝統的に一部屋で全セッションを実施するスタイルを維持して



図2 巨大なサボテンの木(高さ10メートル以上)

きたが、今大会では補助人工心臓コーディネーターセッションを別室にて実施し、特に在宅管理に関して熱心な議論が行われた。これまで参加者数が少なかったコーディネーターの参加者、入会者も増えたようで、機械的補助循環法による治療全体にかかわる職種の多さを考えると、好ましい傾向であると考えられた。一方で、分野横断的側面が強くなる中で、学会としての軸を見失わないようにしながらも現状に応じたセッション構成を考えることは、今後ますます重要になるであろうという印象を持った。

次回 (ISMCS 2018) は、日本人工臓器学会との共催という形で、小野 稔教授(東京大学)大会長のもと、2018年10月31日から11月2日まで東京・お台場にて開催される予定である。

本稿の著者には規定されたCOIはない。